

## S05-801 パブリック・インフォメーション

Public Information(Mary Murphy, 1998)より和訳・要約し、マリーさんの許可を得て掲載。なおマリーさんのウェブサイトは、

<http://www.murphywong.net> 原文は、以下のURLに収録：  
<http://web.archive.org/web/19981202080543/http://www.albany.net/~hello/> (2006. 1に旧サイトから移動)

以前、私はコロンビア大学の「パブリック・インフォメーション」で働いていました。そこは、とてもエキサイティングな職場でした。といっても私の仕事自体は、電話に出て、タイプを打ち、ファイリングやコピーといった平凡なものでした。パブリック・インフォメーションは、大学の公報事務局で、コロンビア大とニューヨーク市、世界の報道関係の間の連絡機関として機能しています。毎春、ピューリッツァー賞を発表するところでもあります。

私の肩書きは「オフィス・アシスタント」でした。オフィス内の階級でいうと、私の下にはコロンビア・カレッジからやってくる若い「学生補佐」だけでした。彼らは、週15時間の勤務実習を果たすのです。補佐の一人に、ハリーという工学部生がいました。彼はスポーツ奨学生で、ボートをしていました。毎朝6時に川に出て、エイトを漕いでいました。どんな天候でも彼らは、コロンビアの大きなCの字をつけて練習していました。ロウイングはコロンビアにとって、とても大切なスポーツの一つです。

1975年9月第2週のある朝、寒くみぞれ混じりの曇りの日でした。9時頃職場に着くと、その朝、川で事故があったと聴かされました。シェルが、コロンビア・ロックの近くで、氷に乗り上げたのです。一人が、泳ぎが苦手で艇にしがみついていたのですが、救助される前に離してしまったのでしょう。遺体はブルックリン橋の近くに浮いているのを発見されました。

最初、それがハリーではないかと恐れました。しかし10時に、死んだ若者の名前が知らされ、初めて聴く名前でした。パブリック・インフォメーションの責任者、フレッド・ニューベルと大学の公式報道官は、急遽記者会見を開き、短い声明を読み上げました。最後の一文は、「犠牲者の名前は、親族への正式連絡がまだとれないので、公表を差し控えます」というものでした。

フレッドは記者会見から戻り、さあ、電話が鳴って忙しくなると繰り返しました。秘書のマリー・アンネと私は、どんなことがあっても溺れた選手の名前を漏らしてはいけないと念を押されました。私達は午前中ずっと電話にかかりつきりになりました。常に文書を読み上げ、どんなに強く突っ込まれても、他の質問には答えませんでした。緊張し、疲れ果てる仕事でした。事故は私達にとって、現実とはどこか離れたものになっていきました。私達は、心を込めず、書かれた言葉を反復するだけの作業に没頭していきました。何度も何度も、私達は、感情を込めないでいられる経文を繰り返しました：「…犠牲者の名前は、親族への正式の連絡がまだとれていないので、公表を差し控えます…犠牲者の名前は、親族への正式の連絡が…犠牲者の名前は…犠牲者の…」

昼を回り、マリー・アンネは昼食に出かけ、私は一人で電話番に残りました。フレッドは、大学の他の役員と部屋に閉じこもって話し合っていました。絶え間ない電話がちよっと止み、私は机にうつ伏して眼を閉じました。次の電話が鳴るまで、1分の平和な時間が流れました。そしてベルが鳴り、私は答えました：「こんにちは。パブリック・インフォメーションです。」

電話の向こうで長い沈黙があり、男の低い声が聴こえました。「溺れた若者の名前を教えてください。」カチンとききました。記者は普通、先に社名と名前を名乗るものです。頭にきましたが、気持ちを抑え、「失礼ですが、どちら様ですか？」電話の主は、その質問を無視しました。声はいらいら、せつついた調子で：「だから、溺れた若者の名前を教えてください！」と繰り返しました。私は、ほとんど事務的に読みました：「…犠牲者の名前は、親族への正式の連絡がまだなので、公表を差し控えていただ

きます。」それと重なるように彼はいいました：「私の息子は漕手です。今朝、彼は川に出たのです。彼が事故にあったのではないかと、教えてくださいませんか？」

私は突然凍りつき、震えました。私はうろたえながらも、筋が通るように努めました：「はい、申し訳ありません。あなたにその情報をお教えする許しを得られませんでした。しかしちょっとお待ちいただければ…」「いや、ちょっと待って、保留にしないで！」彼は叫びました。「どうぞ、そうしないで、」と彼は、「どうぞ」が魔法の言葉であるのを思い出した子供のように、そう付け加えました。

「いいですか？」彼は、落ち着きを取り戻そうともがきながら言いました。「私は、彼の宿舎に電話しました、それから友達に、そしてボート部、スポーツ情報、健康相談室まで、考えられるところ全てに電話したのです。誰も、何も教えてくれませんでした。スポーツ情報室が、あなたのオフィスが助けになると教えてくれたのです。」電話の向こうでは、後ろに誰かがいる様子でした。多分女性で、荒い息遣いで、でも一言もしゃべらず、じっと聴いているだけでした。「あなたは、彼の名前を知っているんですか？」

私の沈黙が彼に、そうだと語っていました。私は20歳で、たぶん溺れた選手と同年、プロの受付係のような演技を辞め、小さな子供のように泣き言をいいはじめました。「お教えできません。困ります。上司に相談させてください。」

しかし彼は必死に別の一手を搾り出しました。「聴いてください、あなたは実際に名前をいうべきではない。あなたが上司に逆らうのは望みません。私が、息子の名前をいいますから、あなたは、イエスカノーか言えばよいのです。こうすれば、あなたはしゃべったことにはならない、でしょう？ だから、どうぞ、イエスカノーか言ってください。おねがいだから。」

私は、たぶん、彼らの息子がもう二度と家に帰ってこないということ、話すことになるのでしょう。もうこれから、月謝を払う必要もなく、祝うべき誕生日もなく、会うべきガールフレンドもなくなることを。私は、自分の人生にはそんなこと、ちっとも心構えできていません。私はもはや、保留ボタンを押し、フレッドにつなぐべきでした。しかしできませんでした。朝は退屈きっていた台詞だったのに、その電話で、死ぬほど厳しい現実となりました。そこには、本当に溺れた若者がいて、そしてまだそれを知らされていない実在の親がいるのでした。電話が長引くほど、毒気のある誘惑が私の耳に溢れてきました。ついに、それが私の心臓に届き、私はそっとささやきました：彼の名前は何か？ 最初に母親がそれを言い、父親の声が繰り返しました。それを聴いて、どっと肩の力が抜けました。「ノー！」私は叫びました。「その名ではありません。あなたの息子さんではありません！」父親は嗚咽し、なんどもありがとと言うおとし、言葉にはなりません。私は眼が回りながらもほっとしました。私達は、ロシアンルーレットをやって、そして当たりを引かずにすんだのだ、と思いました。母親が私にそのこと思い出させるまでは、彼女は静かにいった、「まだ知らないその人たちのために祈りましょう。」

フレッドのオフィスに歩く私の脚は震えっぱなしでした。彼はまだ、役員たちに囲まれていましたが、ノートから視線を上げて言いました：「ご両親に連絡がとれた。名前は報道発表できる。」私達は、ま新しい報道発表を受け取りました。私は、ゆっくり自分の机に戻り、座って、鳴っている電話をとりました。